

名古屋城本丸御殿の復元

—よみがえる城郭御殿の最高傑作—

社団法人中部開発センター

企画事業部 折戸 厚子

「尾張名古屋は城で持つ」と詠われ、300年間の長きにわたって城下町名古屋のシンボルであった名古屋城は、太平洋戦争末期の1945年5月、米軍の空襲によって焼失した。

戦後まもなく、名古屋城の再建を願う機運が盛り上がり、1959年10月には、天守閣が、外観はそのままに鉄筋コンクリートで再建された。しかし、同時に焼失した本丸御殿は、天守閣の隣の跡地に、礎石を残すのみとなっていた。

現在、名古屋市では2010年に開府400年を迎えるにあたり、本丸御殿を復元するプロジェクトを進めている。



天守閣に隣接した本丸御殿復元予想図

天守閣と御殿

一般的に、城といえば天守閣がイメージされることが多い。しかし、観光客が、殿様の城を期待して現存する天守閣に登った場合、そのほとんど何もない内部の空間に物足りなさを感じることもあるのではなかろうか。天守閣は、基本的には戦時のための最終防衛拠点であり、急な階段や広くはとれない空間など、日常生活のために都合の良い建物ではない。平和な江戸時代には、内部は倉庫や空き部屋になっており、物見や見張り以外、めったに立ち入ることがない建物であった。

一方、城主やその家族の生活、政務、来賓客の供応などは、城内の平屋の建物で行われていた。この建物が「城郭御殿」である。本丸や二の丸に作られた御殿は、城主が快適に過ごせるよう、あるいは権力の誇示として、美しく飾られていた。江戸時代の城の中心、武家文化の真髄はこの御殿にあったと言える。

しかし、城が政治の中心ではなくなった現在、天守閣はあっても、御殿のある城はごく少ない。ほとんどの御殿が取り壊し、焼失などで失われている。また、城が戦災などで失われていた場合でも、城の象徴として高くそびえる天守閣は、まっ

さきに再建の対象となるが、資料の不足等で、御殿の再建にまで至ることは希である。

今も残る数少ない御殿のうち、名高いものは国宝であり、世界遺産である二条城二の丸御殿だが、かつて名古屋にはこの二の丸御殿と双壁といわれる城郭御殿の最高傑作「本丸御殿」が存在していた。

1,300面もの障壁画に埋め尽くされた御殿

1610年、関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康は大坂にまだ存続していた豊臣氏に対する圧倒的優位を示すため、名古屋に諸大名を総動員する「天下普請」で大坂城を超える当時最大の城を築城した。2年後の1612年に天守閣が完成。藩主の住まいであり、政庁舎である本丸御殿が1615年に完成した。

1620年、敷地の広い二の丸御殿に、藩主の住まいと政庁舎の機能を移したため、本丸御殿は将軍が上洛する際に宿泊する御成御殿、いわば迎賓館としての役割を果たすことになった。

安土桃山から江戸期は、日本建築史・絵画史・工芸史上で、最も豪壮華麗といわれているが、その時代に、徳川家の威光のもとに造築された本丸御殿は、総面積約3,000㎡、部屋数30を超える空間が、当代一の狩野派の絵師達による1,300面あまりもの障壁画、精巧な彫刻欄間によって埋めつくされた木造建築の極致ともいえる建築物であった。



将軍の居室となる上洛殿

それぞれの部屋は、用途・格式に応じて、水墨山水画や彩色花鳥画など、ふさわしい画題の絵で飾られて美しく調和し、なかでも、1634年、三代将軍家光の上洛にあわせて増築された、将軍の居室となる上洛殿は、幕府御用絵師の狩野探幽によって描かれた帝鑑図や雪中梅竹鳥図など、装飾の限りをつくした華麗なものであった。

明治期の取り壊しを免れ、国宝に指定

明治維新後、古いものを捨て西洋文化や新しい生活様式を取り入れようとする「旧物破却」の風潮によって、各地で歴史ある城郭の取り壊しが行われるようになり、名古屋城でも二の丸御殿などが壊された。

天守閣や本丸御殿も、何度か危機を迎えた後、天皇家に献上され名古屋離宮となった。1930年、名古屋市に下賜されるとともに、天守閣や本丸御殿をはじめとする24棟が国宝に指定され、翌年から一般公開されている。

名古屋城炎上、天守閣は外観のみ再現

1945年5月14日、米軍の空襲によって、天守閣などと共に本丸御殿は焼失した。

戦後まもなく名古屋城再建を願う市民の声があり、名古屋城の象徴ともいべき、天守閣と金シャチは、開府350年、市制70周年の記念事業の一つとして1959年、当時で6億円の巨費を費やし



焼失前の天守閣と本丸御殿

て再建された。鉄筋コンクリート造りではあるが、古写真や絵図面を元にして、外観を正確に復元し、内部は博物館相当施設として、展示室や催事場として利用されることとなった。

一方、本丸御殿は、天守閣の隣の跡地に、礎石を残して、何十年も空き地としてさらされることになった。

残された障壁画と豊富な資料で完全な復元が可能？

空襲の直前、本丸御殿内の取りはずしができる襖絵・杉戸絵や天井板絵など1,049面の障壁画は、別の場所に避難しており焼失を逃れた。残された障壁画は、近世城郭御殿の全貌を概観できる貴重な存在として、重要文化財に指定されている。

また、1930年に名古屋城が国宝に指定された後、名古屋市によって大規模な実測調査が行われており、その際に作成された多くの実測図、写真が戦災を免れていた。

本丸御殿の復元を考えるうえで、以上の2点は非常に重要となる。残された障壁画と、豊富な資料によって、本丸御殿の在りし日の姿を、忠実に蘇らせることは実現可能だろうと言われていた。

進まない本丸御殿復元への道のりの中 市民の応援団体「本丸御殿フォーラム」 が設立

1986年、名古屋城整備基本構想調査会によって、初めて本丸御殿の復元が提言された。1992年には障壁画の修復も始まったが、バブルの崩壊等による資金難や、2005年に控えていた愛知万博開催と中部国際空港開港の2大事業の陰に隠れがちであったことなど、本丸御殿復元の実現への道のりは遅々として進まなかった。

1994年5月、市民ボランティア団体「本丸御殿フォーラム」が設立され、本丸御殿を復元・早期再建することの必要性の市民へのアピールを民間の立場で開始した。同団体は毎年春に「春姫道中」

と名づけた、初代尾張藩主・徳川義直に嫁ぎ、本丸御殿に居住していた春姫の嫁入り行列を再現して、本丸御殿の復元のデモンストレーションをしている。回を重ね、名古屋の春の風物詩となった春姫道中は、市内を練り歩いた後に、本丸御殿の跡地に到着し、春姫が「御殿はどこじゃ！」と叫ぶパフォーマンスをクライマックスにしている。

ポスト愛知万博事業として注目 ついに着工が決定する

2005年、愛知万博のイベントとして「新世紀・名古屋城博」が開催された。これは本丸御殿の復元への関心と理解を深め、機運の盛り上がりをめざすもので、金のしゃちほこを地上に降ろして、手で触れるコーナー等を設けたことなどで人気を呼び、来場者は予想を大きく上回る120万人、収益金約3億円が本丸御殿基金へ寄付された。

また、2005年愛知万博は、開催終了後の余剰金を万博の理念継承事業に充てることを決定。そのうち10億円が名古屋市の本丸御殿の復元に割り当てられ、復元を後押しするとともに、本丸御殿復元に、ポスト愛知万博事業としての脚光を当てた。

2007年、本丸御殿の復元を進めるうえで前提となる文化庁からの「特別史跡の現状変更許可」を受けたことにより、ついに本丸御殿復元は実現に向けて動き出すこととなった。

こうした中、2008年春の春姫道中では「御殿はどこじゃ！」の春姫の問いに、名古屋市長が「御殿はここじゃ、ここに造るんじゃ！」と答えて、御殿復元の着工の決定を伝えるパフォーマンスが行われた。

名古屋開府400年に最初の公開

2010年の名古屋開府400年にあわせて、第一期工事のうちの「虎の間」と呼ばれていた玄関部分を復元し、公開されることが予定されている。工期は、3期10年で総事業費約150億円をかけて復元する。

歴史的意義を踏まえ、焼失前と同等の文化的価値を有する御殿の復元を目指し、復元手法は、原則として旧来の材料・工法による、旧状再現を目指している。建築に用いられる木材は、尾張藩の御用材だった「木曾ヒノキ」を使用、御殿に用いられる障壁画の復元については、当時の絵師が使っていた素材や技法を用いるため、顕微鏡やコンピュータ、資料などで研究・分析。ミクロ単位の観察をもとに緻密な作業が行われている。

建築場所は天守閣の南と、かつてとまったく同じ場所になる。ただし、ここには、重要文化財に指定された本丸御殿の焼け残った礎石が残されているため、まず砂で盛り土をした上、新たに基礎を作ることとなっている。礎石は土の中に保存され、新しい本丸御殿はかつてより位置が高くなることになる。

また、本丸御殿は300年の歴史の中でさまざまな変遷があり、いつの時点の御殿を復元するかが問題となるが、文化的価値が高い家光上洛の際の寛永期と定められた。そのため、本丸御殿の屋根は、古写真にみられるような瓦葺（かわらぶき）屋根ではなく、建築当初の柿葺（こけらぶき）屋

根となる。

寄付金を募集しながらの復元事業

名古屋市は、総工費150億円のうち、1/3を寄付金で集めたいとしている。そのため、地元財界に寄付を要請するとともに、市民に様々なPRを行っている。

寄付には御殿募金、柿募金、巧募金、檜募金などがあり、それぞれ、オリジナルの募金証を発行したり、永代帳に氏名を記載したりするなどの特典のほか、税制上の優遇措置を設けている。

さらに、本丸御殿復元のイメージソングを作成したほか、著名人を招いた講演会を開催。名古屋城ファンをさらに広げる「名古屋城検定」などを実施している。

また、ロゴマーク「NC400」を作成、これは金鯱と本丸御殿の屋根をイメージしたもので、「NC」は、「Nagoya Castle(名古屋城)」「Nagoya City(名古屋市)」「Nagoya Culture(名古屋文化)」の頭文字を、「400」は開府400年を表している。このNC400ロゴマークを活用した商品を開発・販売する企業を募集し、これまでにキーホルダーや根付など名古屋土産、名古屋城土産のほか、ビール、清涼飲料水などが販売され、名古屋市内外に復元プロジェクトを広報するとともに、売り上げの一部が本丸御殿基金に寄付されている。



第1期：玄関・表書院復元工事



第2期：対面所等復元工事



第3期：上洛殿等復元工事



虎の障壁画によって「虎の間」と呼ばれた玄関部



様々なNC400商品



本丸御殿復元イメージ図

インタビュー

名古屋市市民経済局文化観光部
名古屋城整備室長 古川直樹氏



—復元事業の経緯についてお聞かせください。

名古屋城は1945年に空襲で焼失しました。戦後の早い時期、1947年から、再建したいという機運が盛り上がり、市制70周年、開府350年の記念事業という形で、天守閣が1959年に完成しました。その際は、財政的な問題もあって本丸御殿の再建にまでは至らず、本丸御殿はまだ再建されていないという思いがありました。

1986年に、名古屋城整備基本構想調査会が提言を発表し、今後の名古屋城をどう整備していくかという一環の中で、初めて本丸御殿の復元が提言されたのが、公に本丸御殿の復元が持ち出された最初です。その後、1992年度に障壁画の復元が始まり、2002年に「名古屋城本丸御殿積立基金」を設立しました。行政は、単年度で予算を組み立てるので、長期にわたって事業を行うには、年度をまたがって事業を進めていく受け皿が必要です。そのための基金で、そこから募金活動も始まりました。

2007年度、ようやく議会で着工予算がみとめられて、2008年度の工事着工となりました。現在、工事の発注作業が佳境を迎えているところです。着工は、議会の議決後、年が明けて1月から始められるように準備を進めているところです。

一本丸御殿の復元決定前に、障壁画の復元がはじまっていますが、いずれは本丸御殿に使用すると決められていたのでしょうか？

障壁画は、お城にあった単なる建具ではなく、近世の武家文化の芸術品です。そうした芸術性、文化性の高さに着目して、御殿の復元の決定以前から模写が始まっています。

もっとも、1986年度の基本構想の中で、復元された本丸御殿内には復元模写を使用するという項目が入っていますので、まったく切り離しての事業ではないと思います。まだ、本丸御殿の復元ができるかどうかは定かではなかったため、できるところ、すべきことから始めて、行く末は本丸御殿全体につなげていきたいという気持ちで始まったものと思います。

復元模写については、単なる模写ではなく、当時の紙を梳き、当時の材料を集めることから始めています。当時の筆づかいをしっかりとるために、顕微鏡やコンピュータなどで研究、分析しながらの復元で、なかなか時間がかかる作業になっています。1992年から始まり、2007年末に、約300面の模写が終了しました。

完成したものについては、天守閣の展示スペースで順次公開しています。また、来年度にはまとまった形での復元模写絵の展示会を計画しています。



名古屋城西之丸にある模写室

一総工費の1/3を寄付金でまかなうことを目標とされているのはなぜでしょう？

寄付金を集めながらの事業にしようというのは、天守閣の再建の際に、市民の方々から熱い運動があり、募金が自主的に集まりはじめ、総工事費の1/3をまかなったという前例があったからです。

戦争で、町も名古屋城も壊滅状態になったのですが、終戦後、平和の象徴として、名古屋城を取り戻したいという思いがあったようです。尾張名古屋は城で持つ、名古屋城は自分たちの誇りだ、名古屋には金のシャチがいる、という熱い思いでご支援をいただいたと聞いています。

天守閣がそういう盛り上がりの中でできたので、本丸御殿も市民の皆様からの賛同を得ながら、作っていくのが理想だろうということで、募金活動を行っています。

2007年3月末での数字が23億円。昨年から、個人の方から寄付金が増えてきました。愛知万博からの寄付金があった年を除けば、件数、金額ともに過去最高となっています。本丸御殿のことが知られるようになって、その結果として寄付が集まってきたのかなと思います。

本丸御殿について周知されていき、文化的価値への理解が深まるほど、こんな立派な御殿が復元されれば、名古屋の将来のためになるなというお気持ちになっていただけたらと思います。PRをしながら、なおかつ、それを募金につなげるという形をとるように苦心しています。

一今まで、一番、効果があったPR方法は何でしたか？

人気があるのは柿（こけら）募金です。よく、お寺の修復の際などに瓦募金が募集されることがありますが、それと同じで、屋根材に使う柿の見えない部分に、寄付者のお名前を書いていただくものです。一般的な瓦募金よりは少し安くて、大人なら3000円、子供なら1000円で、本丸御殿に自分の名前が残るということで、復元に協力するという実感を持ってもらえるようです。

これは、2006年にオアシス21で行った本丸御殿PRのイベントから始まりました。このイベントの際に、柿募金をいただいた方たちには、ヒノキの間伐材をくりぬいて、ヒノキの苗を植えた、親子鉢をお分けしています。2年後に、育った苗を、山にお返しにいきましょうという活動も行って、今秋9月に、岐阜県中津川の森に、初めての植樹行事を行う予定です。

本丸御殿の復元には、樹齢300～400年の木曾ヒノキを使う予定です。これは、ちょうど本丸御殿ができたころに、当時の人たちが植えたものです。その頃は、全国的な築城ブームで、かなりの木が切り出され、山が荒れてしまい、その反省にたって、尾張藩の木曾地域の山を保護し、植樹に努めていたそうです。

このように、切った木のかわりに新しい木を植えて、山にお返ししていく、自然環境を修復しながら事業を進めていこうとするものです。

一愛・地球博の収益金が、本丸御殿の復元事業に分配されたのはなぜでしょうか？

従来の博覧会の収益金は、国が所管する財団法人などを設立し、引き継いでいました。愛・地球博はそうした団体は作らず、既存の団体に分配することになりました。

そのうち、10億円を本丸御殿の事業に頂戴しました。これは、本丸御殿の復元事業が、「愛・地球博」を記憶に刻み、基本理念を継承発展させる事業であると認められたからです。

本丸御殿は地元の公共団体、経済界、市民をあ



柿板記入例

げでの浄財で復元されます。地球市民、モリゾーキッコロのための迎賓館であり、愛・地球博への思いをいつまでも想起させる事業となります。

また、愛・地球博は、テーマを「地球の叡智」として、環境に優しい行動を心がけたり、未来の子供たちに美しい地球を残すことを伝えたりしました。本丸御殿の復元は、木曾ヒノキという400年かけて育った木が、また建物となって400年生きます。その木が育つ豊かな森を作る、森、川、水といった自然のサイクルや環境について考えるきっかけとすることで、持続可能な循環型社会のシンボルになります。自然のすばらしさを木材を通して学ぶ、万博の精神に沿った大きな事業です。

一その他のPRイベントについてご紹介ください。

名古屋の歴史や名古屋城について、語っていただく歴史文化講演会を昨年度から始めています。年に4回ずつの予定で、都心に限らず、各区を回っていく予定です。いろんな地域をまわっていくことで、広く地域の方々の関心と呼び、地域を巻き込んだ展開をしていきます。

また、名古屋城宵祭り際には、名古屋城検定の高得点者の表彰を行いました。この時期に、名古屋城を訪れることによって、検定で勉強されたことを再度、ご覧いただけたと考えております。それから、公開講座として、第1回目の問題の傾向や、次回の試験に向けての勉強ができるような講座を行いました。

それから、9月20日は、「ゆめづくり狂言会」を予定しています。名古屋城の本丸御殿の復元をテーマに、「夢づくり」という新作狂言を作っていただき、その初演とからめて、和泉流の狂言を上演します。

10月の名古屋まつりでも、オアシス21にてPRを行います。木曾ヒノキを通じてつながりのある中津川や、名古屋ができる前の中心地であった清洲、石垣の一部が来たという幡豆、名古屋と同じく開村400年を迎える有松などに参加をいただいて、地域のつながりや歴史を学びながら、楽し

んでいただけるようなイベントを展開していきます。

また、名古屋まつりのメインイベントであるパレードにも参加します。フラワーカーを用意して、イメージソングを歌っている新妻聖子さんに乗っていただく予定です。

一イメージソング、新作狂言、名古屋城検定など、様々な企画がありますが、こうした豊富なアイデアはどのように発想されているのでしょうか？

イメージソングのCD販売については、(株)名古屋キャスルが創立50周年ということで、なにか名古屋のためになることをしたいと、お客様を中心としたサポーターを集めて、「交響詩・名古屋城」を作ってくださったことから始まりました。

その曲のメロディがとても良かったので、歌詞をつけ「煌(きら)めきの未来へ」というタイトルで本丸御殿の復元のイメージソングとしてCD発売させていただきました。曲は名古屋市で使ってくださいと寄付していただいたので、名フィルも機会のあるごとに演奏していますし、合唱曲にして、小中学校や市民合唱団に歌っていただいています。

狂言については、2006年に、木曾ヒノキを本丸御殿の御用材として、切り出す斧入れ行事があったのですが、その参加者の中に、狂言に詳しい方がいて、民間の立場で応援していただけるようになりました。せっかくなので、本丸御殿の復元をテーマとした狂言を作ったらどうでしょうと、人間国宝の野村萬さんなどに話を付けていただき、いろいろな方をお招きして大変立派な催しにさせていただきました。構想から2年かかり、ようやく実現します。事業に関心を持ってくださる方達が、それぞれ自分の得意な分野で協力してくださり、相互のネットワークで次の展開につながり、実現したものです。

新作狂言のストーリーも、山伏が一人で御殿を再建しようとしたけれど難しくて、みんなの力を借りて実現するという内容で、まさに「夢づくり」、

皆様のご協力をいただく本丸御殿の復元に相応しい内容になっています。

名古屋城検定については、名古屋市の企画です。

他にも市長のアイデアから出た企画などもあります。市の内部、外部、色々なところから出たアイデアをつないでいながら、PR活動を行っています。

一名古屋城検定についてお聞かせください。

名古屋城検定のために、新しく本を作りました。これを機会に、写真を新たに撮り直し、一般の方に、名古屋城を理解していただけるようなわかりやすい本となっています。ここから試験の問題の7割を出題することになっており、また、試験当日持ち込めるテキストになっています。

試験当日は天気が悪く、検定料も当日支払いを予定している方がほとんどだったため、欠席が多くなるのではと心配していたのですが、884人が申し込まれたうち、827人が受験されました。

当初の予定では、今年の試験以降は、来年度に中級、2010年の400年の年に上級を行う予定だったのですが、予想以上にたくさんの方に参加していただいたため、追加で、今年の12月にも初級試験を行おうと考えています。

名古屋城や名古屋の歴史を知っていただくことで、名古屋に対する愛着も持っていただけることを期待しています。検定料から必要経費を除いた分は、本丸御殿への寄付になっています。歴史的な価値を知っていただくほど、本丸御殿への関心



合格者に送られた初級認定証

や応援が高まり、しかも寄付になる。こんなふう
に、本丸御殿をアピールしつつ、それが募金につ
ながっていくような形をとるようにしています。

自分で参加することで、へー、こうなんだ面白
いねと思ってもらい、納得してもらいながら、経
費の一部を本丸御殿のほうにいただける。こうし
た形はなかなか良いやり方なのではないかと思っ
ています。

—NC400のロゴマークについてお聞かせくださ い。

エビフライみたいだと言われたりもしますが、
(笑) 図案は、本丸御殿の屋根と金シャチをイメ
ージしたものです。

NCとは名古屋キャッスルであり、名古屋カル
チャーであり、名古屋シティでもあります。当初
は、本丸御殿の復元のためのシンボルマークで
したが、開府400年の意味合いが強くなってきて
います。今後は、本丸御殿の復元を中心事業に、様
々な開府400年関連事業に使われていくこととな
るでしょう。

マスコットキャラクターも募集し、今後、いろ
いろな形で、名古屋の100年に一度の誕生日をお
祝いしながら、元気な名古屋を発信していきたい
です。



エビフライ？ NC400ロゴマーク

—熊本城の本丸御殿の整備など、各地で本丸御 殿が復元されつつあるのには、理由があるの でしょうか？

基本的に、日本の多くの都市は、1600年の関が
原の戦い以降に、お城ができたり、町ができたり
しています。そのため、全国的に築城400年を迎
えているところが多いです。熊本城や名古屋城の
ように、明治期まで何百年と御殿があったのに
失ったところは、どこも、いつかは再建したいと
いう気持ちがあったかと思います。それが節目の
ときを迎えて、今を逃したくないと、復元ラッシュ
を迎えているのでしょう。

名古屋城は、家康が天下を平定していく中で、
それまでの城作りの集大成としてできた城です。
大きな築城では、名古屋城がほぼ最後になります。
熊本城は先に整備され、400年事業を展開された
ので、復元の仕方や盛り上げ方など、視察に行っ
て参考にしている部分はあります。

ところで、熊本城は西南戦争のときに焼失して
いて、当時の記録が名古屋城のように残されて
いませんでした。資料がない中での復元という難
しさがあるようです。焼失前は、当然、絵が描かれ、
細工があったはずの襖や欄間が、ほとんどの部屋
で白木のままです。記録が無い部分を想像で補っ
てはいけないというのが、今の文化庁のスタンス
だからです。二間だけは、極彩色に絵を描いて整
備していますが、それも当時の詳細な記録がない
ため、一部、同じ狩野派が描いた二条城や名古屋
城の障壁絵を参考にされたと聞いています。熊本



上洛殿1/8の模型のための骨組みづくり

城は熊本城なりの苦労があったと思います。

一方、名古屋城は、豊富な資料が残っていますが、写真と写真の切れ目がどうなっていたか不明であったり、白黒写真がほとんどのため色はどうだったのだろうかなど、わからない部分があります。

現在、上洛殿の1/8の模型を地元の職人の方達の協力で作っているのですが、写真が残っていても、詳細な技術については、わからなくなっている部分があるようです。今年の秋には完成する予定ですが、皆さん、本業を忘れて、夢中になって作られていると聞きます。今回の再建は、前例のない難しさがあります。

—今後の抱負や方向性等、課題等についてお聞かせください。

今までは、理念先行で、こういう形で復元していきたいという考えが先にたっていました。今年度から着工といよいよ地に足がつき、完成へと続くこととなります。これからが本番、新たな気持ちで、かぶとの緒を締め直してやっていかないとけません。後世に残るすばらしいものをつくっていくというゴールはわかっていますので、そこに向かって、全力投球でやっていきます。着工して、少しずつ形ができていくと、市民の皆さんのイメージや、本丸御殿を見る目も変わっていくでしょう。新たな盛り上がり、機運がひろがっていくことを期待しています。

今後、工事が始まりますが、工事が始まって一段落ではありません。その途中をどういう形で見させていただきながら、完成させていただくかが課題です。浄財を頂戴した市民の宝です。宝物だからと近づけないのではなく、なるべくその素晴らしさを近くで見させていただきたいです。天井裏などは、完成してしまえば隠れてしまうので、なかなか見る機会がありません。そういう建築途中をぜひ公開したいと思います。そのために、どういう公開をするかを考えているところです。

現在、伝統技術の後継者難が言われていますが、この地に、高度な技を持つ職人達が集まり、子供

たちに見てもらふことで、日本の伝統技術の素晴らしさを伝えていきたいと考えています。

からくり人形から始まり、自動車産業につながる名古屋のものづくりの伝統は、近世から始まったという説があります。また、ここから、宮大工をはじめ、名古屋仏壇、名古屋扇子など、いろいろな技術が根付きました。もう一度、技術力を集結させることで、さらにこの地域の力を底上げしていく側面もあろうかと思っています。

愛知、名古屋の知名度は上がってきていますし、名古屋城にも年間100万人程の観光客が訪れます。しかし、名古屋の皆さんは、自虐的に名古屋には見せるものがないとおっしゃりがちです。

本丸御殿が復元された暁には、江戸初期の武家美術の粋を集めた一大美術館になるのではないかと思います。地域の誇り、名古屋発の文化の伝道、名古屋大交流という志でつくってきたいです。